

# 悲運の皇子 雨海博洋

— 重仁親王の流離 —

信濃川上郷は八ツ岳山麓野辺山の裾を流れる千曲川の最上流に沿って点在する村落である。それは、小海線信濃川上駅近くの御所平からはじまって、原・大深山・居倉・秋山・梓山と各部落が千曲川に接して連っており、それらを縫つ、秩父の三峰神社へ通ずる古い街道がある。深い山々と清冽な流れに覆われ、抱かれた美しい秘境でもある。この御所平に次のような王朝末の悲運の皇子の話が犬切に語り伝えられている。

平安朝後期の久寿二年皇位継承問題から端を発し、皇室、摂政関白、武家等親子兄弟が骨肉二分して血で血を洗う悲劇を生んだいわゆる保元の乱に破れた崇徳上皇は讃岐に遠流の身となり、崇徳上皇の皇子重仁親王は左大臣藤原頼長の同門忠良が守護、京のがれ信濃路に入り、保元の乱に上皇方に荷担した更級村上郷の村上基国に一時身を寄せ、更に、小室から海瀬と千曲を廻り、相

木から臨幸峠を経て御所平御殿窪（みどくのくぼ）に至り、安住の地として居を構えたと言われている。この時の御歌に、

うちひさす都を出でて千曲川 上つ瀬遠くわれは来にけりと詠まれた。

それから数年、応保二年薄幸漂白の皇子は、再起の日もなく御年わずか二十三歳でこの世を去り、御霊神社に祀られたわけである。話は前後するが基国のものを親王が辞するとき、基国から進献された白馬にうち跨り、基国の士卒がこれを護り千曲川を廻行する此の時の親王のお姿が現在御霊神社に伝る御神体であると言ふことである。……この御霊神社の境内にミヅメ桜と呼ばれる老樹がある。近在にあまり見かけない樹木である。……この木の幹の太さ胸高直径で一・七〇米、樹齢七〇〇年、地上から三米位のところに老樹特有のウロ穴があり、よくモモンガーが住んでいる。△「館報かわかみ」第一〇四号昭和43年8月30日▽  
これは、実際土地の人の文章によったほうが実感があると思っ

て、川上村公民館発行の「館報」の一部を借用させてもらった。

ところが、佐藤春夫の『佐久内裏』という作品にも、詩人特有の敏感な感覚と内に秘めた旺盛な探求心で、重仁親王の流離の運命を描いてある。この作品の成立の蔭には、氏の「良吉物」と言われた、佐藤春夫の佐久疎開時期の作品のモデルになった郷土史家糊沢竜吉氏が存在があった。糊沢氏は『佐久内裏』には漆沢良吉という名前で登場して、重仁親王の御所平実在説を成立させる重要人物となっている。氏は詩歌を解し、かつものする人として、佐久疎開中の佐藤春夫のこよなき話相手であり、また歴史学専攻者として歴史資料の提供者でもあった。佐藤春夫はこの史的資料と風土的考証の両面に、詩人的想像と小説家的推理を加えて一篇の珠玉のような史話をものしている。史話とした理由は『佐久の内裏』に「これは保元の乱を書いた歴史小説ではない。わたくしの疎開談のなかに偶々保元の乱の事が入って来ただけのことで、別稿『夏山家』の姉妹篇となるもの。」といった意志を重んじたからである。春夫は歴史小説ではなく、実際にあった史的伝承として扱えようとしたのである。

## 二

『佐久内裏』では、先ず、「(八つが嶽) 山麓に一番近く、駅から二三キロも出たばかりの部落が御所平という字で、土地の伝えでは、保元の乱の後に崇徳帝の皇子重仁親王がここにお住いになったのでこの地名ができたと言ひ、この地で、なくなりになった親王をお祀した御霊神社というのもある」と御所平の地名の起源と現存の

御霊神社とによって、重仁親王に関心をもたれている。次に良吉(即ち糊沢氏)の調べあげた「佐久川上村御所平要図」によって、重仁親王の御所平定着を認めようとしてされている。御所平の古名をおげつらった部分をみると

それによると男橋の向ふにある竜昌寺のうらに御殿窪といふのは、内裏山の西端に接して男山と穴沢山とに西北を囲まれた南受の山懐にあってその川向ひの現に住吉神社のあるあたり御殿窪の真向は大門先、その東寄り黒沢川沿ひに馬場平、鷹揚場などの地名が見えて野辺山の山裾を甲州に向ふ小海線の線路に沿うて天主の台、鷹放などの地名もあり、なほ余白の註記に「図上、所在不明ナレド兵部ト云フ地名モアリ」と記入されている。

と、御殿窪、内裏山、大門先、馬場平、鷹揚場、天主の台、鷹放、兵部などの地名が並べられている。これらを見れば皇統を継ぐべき身分であられた崇徳院皇子重仁親王が如何にも住まわれ、兵を挙げ、機をねらって調練の跡がしのばれ、貴族のスボーツ鷹狩も行われたように想われるのである。更に御所平を実地踏査されて、「目測では間口三十間に奥行二十間ばかりの長方形の笹原で、この屋敷址の殆んど中央よりやや前方に方二尺ばかりの石で刻んだ祠があって、その正面どこやら(場所の記憶は明確でない)に刻まれた文字によってそれが熊野神社であることを知り、さうしてそれによってこの台地が正しく御殿窪であり重仁親王の謫居の址であって同時に宮殿だと確信し、またこの宮殿跡近くに湧れのあるのもってまます御殿址だと確認されている。

次に、これはまた棚沢氏が『保元物語』その他の文献によって、保元の乱に出馬した信濃武士の家系を調べあげられた綿密な資料をもとに重仁親王と信濃との関連性を説いておられる。この資料は大変貴重なもので、後に説く重仁親王の流離譚にも大きな関係をもっている。ここにその全員をあげ紹介する余地がないので、概略を述べる。後白河天皇方に海野小太郎幸親をはじめとして信州の武門の多くが付き、それに対して崇徳上皇方には信濃守行通、村上判官代為國(父)、村上判官代基國(子)、片桐弥八郎為重くらいであった。このうち基國だけは敗れて後信濃に逃げ戻り、更級郡日名(更級郡日原村)の山中に隠れ、やがて親王一行の信濃入りの大きな役割を果たしたというようになっている。

保元の乱に敗れた崇徳上皇については歴史にも残り、上田秋成の『白峯』にも書かれて周知のことになっているが、皇子重仁親王についてはあまり知られることなく信濃の奥地に秘められていたのを取上げた『佐久の内裏』は大きな意味をもっている。ただ、「身方の惨敗の後には女装して出家のために仁和寺に急ぐ途中を敵に捕へられたとほんの一二句保元物語に見えてゐた外、その後はどうなったのやら消息も知られてはゐない」という個所には問題がある。『保元物語』にも一、二句どころか、「上巻に後白河院御即位の事」、「新院御謀叛思し召し立たる事」の二場面、中巻には「重仁親王御出家の事」、下巻には「新院讃州に御遷幸の事」、「新院御経沈めの事付けたり崩御の事」の二場面に扱われている。その他「今鏡」にもかなりくわしく書かれ、『本朝皇胤紹運録』、『集成御系譜

考』の系図関係にも示され、『仁和寺諸院家記』、『大日本史』、『皇子列伝』などにも誌されている。そこで、これらの資料を用いて、重仁親王の乱後の行動、生き方などの消息を追求してみたい。

### 三

先ず、『本朝皇胤紹運録』によると重仁親王は「三品。出家。法名空性」とあって、出家したようになっている。没年は「一代要記」によれば「応保二年一月二十八日薨」となっている。また『集成御系譜考』には母兵衛佐局、保延六年庚申誕生、久安六年三品、初メ美福門院子養セラレ、保元ノ乱後、仁和寺花藏院二居ラル、空性ト云、応保二年正月 日二十三歳薨」と乱後、仁和寺花藏院におられたことになっている。しかも『今鏡』には

一の御子(重仁親王)も、御くしおろし給ひて、仁和寺大僧正寛暁と申ししにつかせ給ひて、真言などならはせ給ひけるに、敏くめでたくおはしましければ、昔の真如親王もかくやと見えさせたまひけるに、御足のやまひおもくならせ給ひて、ひととせうせさせ給ひにけり。御とし二十二三ばかりにやなり給ひけむ。八「はらゝの御子」V

とあり、「御足のやまひ」即ち脚気のため仁和寺で亡くなったように書れている。このように保元の乱後、親王は仁和華藏院にて出家し、後脚気のため応保二年一月二十八日薨せられたということになる。

崇徳院も重仁親王も、敗戦後ばらばらにはなりながら、それぞれ

仁和寺に入られて出家されている。仁和寺は宇多天皇が仁和四年に創立され、同寺で落飾出家され、寺内に御室を設け、承平元年（九三二）七月十九日仁和寺で崩じられ、『日本紀略』『二代要記』他）て以来歴代の皇族が入室された宮門跡であった。このような寺との関係からお二方は敗北者のたどる出家の場所を仁和寺としたのである。しかし、単に歴史的関連だけでなく、他に人間的深い関係があったのである。その関係を系図によって示せば次のようになる。



まず、寛暁から調べていくと、寛暁は堀河院の御子で、大僧正、保元四年正月八日五十七歳で仁和寺に滅せられた（『仁和寺諸院家記』華藏院の条。また華藏院の大僧正（『本朝皇胤紹運録』）であったので、重仁親王は寛暁の弟子となり華藏院に入られたのである。朝廷の命によって、親王の髪を剃られる時、再三辞退申し上げたが、宣旨が重かったので力なく剃落されたのであった（『保元物語』中）。即ち親王は大叔父寛暁の仁和寺華藏院に弟子入りし、その手で出家の儀式をもらったのである。

覚性法親王は保元の乱（保元元年七月十一日）の年の三月仁和寺入り法名を信法と称し、後覚性と改められ、紫金台寺御室と申された（『仁和寺系譜』、『紹運録』）。崇徳院と同母弟出家前は本仁親王

と称せられた。そのような関係で、崇徳院は御弟の仁和寺の宮（覚性法親王）を頼られ讃岐に御遷幸されるまで、この御室に住せられた（『今鏡』八重の沙路）。また覚性は崇徳院が讃岐に流されて後もしばしば訪れられて（『今鏡』はら／＼の御子）兄崇徳院一家のよき同情者であった。

元性は法印で仁和寺華藏院に入れられ（『紹運録』）、覚性の下にあったようである。『今鏡』にも「又讃岐院の皇子は、それも仁和寺の宮におはしますなる、法印にならせ給へるとぞ聞えさせたまふ。それも真言をよく習はせ給ひて、勤め行はせ給へりとぞ。」（はら／＼の御子）とある。華藏院に入れられた年月は不明であるが、『本朝皇胤紹運録』に親王名がなく法名だけ記されているのをみると余程早くから入室されていたと思われる。紹運録の頭注の『仁和寺諸院家記』に「元性改覚惠号官法師」とある。華藏院で兄重仁親王法名空性と五、六年生活を共にされたであろう。

このように重仁親王は大叔父寛暁の仁和寺華藏院に傷心の身を入れられ剃髪して空性と号して、弟の元性と慰めあっては真言の法に精進され、また叔父の覚性からもいたわられて生活したことがわかる。

ただ、ここで不思議なことは、崇徳上皇、重仁親王と父子相繼いで仁和寺に入られたはずなのに、この間の消息をお互いに知らなかった点である。即ち崇徳院が讃岐に流される折、『保元物語』下には、

況一宮重仁親王の御行末も覚束なく、一日白河殿の合戦の庭より煙の中をかき分けて迷出し女房達、志賀の山越、三井寺などこそと思召されしかども、其音信もなし。今は此世にては二度と思ひ合まじくければ、只生を隔たるが如にぞ思召れける。

と白河殿の合戦の折、離れ離れになって、崇徳院が流されるまで、同じ仁和寺にいる重仁親王のことを知らず、三井寺辺に逃れたるかと思われていたようだ。これは崇徳院が弟の仁和寺宮寛性の紫金山台寺御室に身を寄せ、重仁親王は仁和寺の大僧正大叔父寛暁の華藏院にあったまま、幽閉され、監視され、両者の連絡も厳しく禁止されていたものと思われる。また、同じく「保元物語」中「重仁親王御出家の事」にも「又重仁親王」をば、日来尋まいらせけれども、御行末をしりたてまつらざりける」とある。

また一方では次のような話が誌されてある。重仁親王が女房車に乗って仁和寺へ赴かれる途次、平判官実俊に尋問され、更に事の由を実俊が奏聞すると、朝廷から「花山院の僧正定堯、参つて申さるゝ、子細有つて、中の御門東洞院なる御所へぞうつし奉ける」(『古活字本保元物語』)ということになる。一時何かの理由があつて「中の御門東洞院なる御所」に閉じ込められたようである。恐らく、先に仁和寺に入られた父崇徳院と合せることを避けた仕打ちと判定される。

このように、合戦直後の重仁親王の動静に明確さを欠くことが、やがて重仁親王の信濃国への流離譚を生む一つの要因となつていゝと思われるのである。

かつて亀井勝一郎は、その著『王朝の色好みと求道』の中に、貴

種流離譚には次の三つの条件を持つていと述べられていた。即ち

第一 天皇と血縁関係をもつ貴人の運命の逆転と失脚と死。

第二 ある極限情況に生きること。

第三 神追ひ、罪による流刑、迫害による彷徨といった風に、安定とか幸福から見放された存在である。

といったものである。崇徳院の第一皇子として、当然皇位は「よものがれさせ給はじと万人おもひあへり」(『保元物語』上後白河院即位の事)といった身分であられたのに、保元の乱の敗北によつて、身を寄せる所なく、仁和寺で出家し、幽閉に近い生活を送られ、二十三歳の若さで薨じるといった生涯と運命は正に右の貴種流離譚の三条件に適うと言えるであろう。特に「日来は此君こそ、御位にはと万人思ひあへりに、かやうにならせ給ければ、あさましななどもをろかなり」(『保元物語』中重仁親王御出家の事)と万人に期待され、同情されていた。いや、親王の敵方後白河天皇側の将平清盛でさえ「此親王と申は、故刊部卿忠盛の養君にし奉りければ、清盛見放奉まじかりけれ共、世に随ふ習こそ悲しけれ。されば伝承つて、内々涙をながしけり」(前同書、同章)と父忠盛の養君にせよ、親王の出家に涙しているのである。このような人々の同情と哀惜の情が、親王の幸福な再生を祈つて流離譚を生ませたものであろう。

#### 四

重仁親王の流離譚が、なぜはるばると信濃国、それも最奥の信濃川上に定着したのであろうか。これからこの問題について考富してみたい。

先ず、冒頭の信濃川上に伝わる重仁親王の話の中に出てくる村上基国に着目する必要がある。基国は親王の一行を信濃に迎え入れ、更に安全圏の信濃川上に向われる時、白馬を奉ったるあるように、親王の信濃入りに大きな力となったとある。基国は棚沢氏の調査によれば、信濃武士団のうち崇徳上皇方についた総将格で、その父為国は保元の乱で戦死したが、基国は信濃国に逃れ帰えり、更級郡日名（日原村）の山中に隠れ、後源頼朝に仕えて功があった。頼朝の浅間の巻狩りには、北佐久郡小田井の皎月が原で犬追物を行う榮に浴したりして、弓馬の名誉も高かったらしく、頼朝の子頼家の師範を勤めたほどであったとか。敗残の身から榮光の座に復した基国並びに、彼の子孫たちは、敗残者の汚名雪辱、あるいは名誉挽回のために重仁親王の信濃落ちの話の基を作ったのではないかと考えられる。いや、実際に基国には重仁親王を奉って機会あれば再挙を計ろうとする意図があったのではないか。棚沢氏の地名考証によると、御所平近辺の馬場平、天主台、現在地不明ではあるが遠くはないと思われる兵部、これらは親王が天主台にあって馬場平の訓練を鑑閲したと言われ、兵部は名の示す通り兵事を司る役所、または軍隊の駐屯所とみられる。その上、この辺はかつて良馬を産し、梓山部落には弓に用いる梓の木が多くあったなど重仁親王の再挙の意志を物語っているという。この蔭の力になったのが基国であることは親王の信濃落ちの伝承のいきさつを思えば合点できよう。実は、蔭の力どころではなく、再挙計画は野心家基国自身の考えであったと思う。それに皇統を継ぐべき皇子であられた重仁親王をいただくことは、敗残者として信濃に引き籠った身を正義付けることにもなるの

である。

また、基国が重仁親王をいただくことによって自身と家門の格付けは、敵方後白河天皇についた信濃出身の武将団の総帥海野小太郎幸親に対抗して必要であったと思われる節がある。棚沢氏の調査によれば、海野家は清和天皇の皇子貞保親王が湯治のため信濃国に下り、小懸の滋野に土着して滋野氏の祖となった。更にこの子孫が、海野、禰津、望月の三氏に分れ、滋野三家と称し、東信に繁栄して大豪族になったという。ところが、『皇胤紹運録』によって調べてみると貞保親王は「母二条后、貞観十二年誕生、元慶六年陽成天皇ト同じク禁中ニ冠セラル、三品上野太守中務卿二品式部卿延長二年六月五十五歳薨南宮又桂親王と云」とあり、極官は中務卿であり、信濃国土着の気配はない。親王の御子たちも、源国忠（長子）は従五位下内蔵頭、源国珍（次子）は従四位上春宮大進といったように中央官の道を歩んでいる。このようなことから貞保親王が信濃土着したとするのは事実を反し、ただ滋野三家の大豪族が家門格付けのための話に過ぎない。

この現象は単に家門のみならず、大きくその地方、部落集合体でも競って尊貴との関係付けをしようとする傾向がある。それは山間僻地に多くみられる現象でもある。全国諸地方に点在する平家落人部落なるもの大半もこれに類するものである。また木地師は惟喬親王を祖先神と崇敬しているが、村井康彦氏の『日本文化小史』には、「木地師が親王をかっぎ出した理由の一つとして、中世、供御人とか座衆がしばしば皇族や公家を本所と仰ぎ、その権威を排他的な独占権の根拠としたのと同様の計算が、働いていただろう」とあ

る。村上家、滋野家にもあてはまる問題である。

信濃川上にも、また重仁親王を密かに守護してきたと言われている藤原忠実の子忠良ら藤原一門が御所平に住みついて、由井姓を名吉ったと伝えられている。棚沢氏によれば、忠良の子忠親が輓負であつたので、その身分をかくすために由井と音をなまっただとてである。また御所平の隣部落の「原」も藤原の「藤」をとつたと言われている。

更に面白いことに、川上村に山を挟んで隣接している相木村にも御所平があり、後一条天皇の長元年間（一〇二八—一〇三六）に里仁親王がこの地に配流になられたという伝えを持っている。『佐久内裏』の中に相木に伝わる里仁親王にまつわる伝説と名称が次のごとく紹介されている。

地主の相木信国といふのが仮の御所を修理して迎へ奉つた場所が御所平で、村内には、その他『御所の向』また親王が好んで水浴された『池の上』『衣掛石』『臨幸坂』などの地名のゆかに、おん興をかいた仕丁（よぼう）の住んだといふ場所が『宮丁』（みやぢょう）の地名が残っているし、『御墓山』と名づけて里仁親王墳墓の地と称するものもある。

後一条天皇の頃とすれば、重仁親王の頃より二千年も前のことになる。ところが里仁親王なる方は『皇胤紹運録』はじめ諸書に全然見当らない。佐藤春夫はこの現象に対して、「里仁親王の配流といふ長元元年（一〇二八）は道長の薨じた翌年に当つてゐるから、その機会に大黒柱を失つた藤原氏の打倒を謀つて成らず、かへつて藤原氏のために中流の刑を課せられ、果ては皇室の系図からさへ抹殺

されてしまつたのではあるまいか。」と作家的推量を下されている。それにしても「里仁」、「重仁」の名の類似性が気になる所である。相木も川上と同じく信濃の最果ての地といわれる所である。しかも隣村川上には輝しい語り伝えがある。とすれば、相木村とてもそのままにはおけない。「重仁」を「里仁」に、年代も更に百年以上もさかのぼつて対抗したとみるべきであろう。史実に照らせば重仁親王はれっきとした実在の人物であつた。それに対して、里仁親王はその実在を何一つ裏付けるものがなく、却つて重仁親王伝説を基にし成つた派生伝説とみるべきであろう。

重仁親王の流離譚が信濃川上の御所平に定着したもう一つの可能性に熊野信仰の問題があげられる。もと御所平があつたと思われ所に現在竜昌寺という寺が建ち、その寺の上に熊野神社が祀られている。寺は上流の部落からこの御所平の御殿窪に移転したと言われ、熊野神社はそれより古くからあつたものとされ、村人たちの尊敬を集めていたそうである。平安末期院政時代には皇室の熊野詣が頻繁であつたことはよく知られているところである。ちなみに各上皇方の熊野参詣回数を調べてみると、白河上皇九度、羽鳥上皇二十一度、後白河上皇三十四度、崇徳上皇九度に及んでいる。重仁親王の父帝崇徳院も熊野と浅からぬ縁があることになる。その上、保元の乱に於いて、崇徳上皇方の将源為義は「熊野別当、住吉の神主も鐙に取」（保元物語）中とあるように、熊野三社の別当行範を女婿としてゐる（参考保元物語）。従つて上皇方の敗戦に及んで、特にこの乱の原因となり、かつ万人が皇統を継ぐべき皇子と信じていた重仁親王が出家され、やがて二十三歳のうら若い身で薨じられ

たことへの同情が、熊野関係の人々、熊野修験者らの口によって語り伝えられ、保元の乱と縁の深い将兵を多く出した信濃に定着するようになったとも考えられる。しかも、川上郷は熊野と同じく三山信仰の三峯詣の街道筋に当たっていた。

また附言すれば、重仁親王の伝説には名月伝説の要素が加っていていると思われる。信濃は古来、名月の地として名高く、月に関する多くの話を持っている。

重仁親王の薨ぜられたのは既述のように応保二年一月二十八日（『一代要記』）であった。しかるに川上では親王の命日を中秋の名月の八月十五日としている。また前述した村上基国は後に頼朝に仕え、浅間の巻狩の折に犬追物の腕前を示した皎月が原（御代田村小田井分）にも月に関する伝説がある。『佐久内裏』並びに棚沢氏の話によれば、用明天皇の元年（五八六）、皎月という官女が勅勸を蒙って御代田村小田井分に流されてきた。その官女は常に白馬にまたがって皎月が原の馬場を乗りまわしていたが、八月十五夜、月明に乗じて白馬の背に乗ったまま昇天したという。「皎月」は「好月」とも書かれる。これは名月のことで、『竹取物語』のかぐや姫同様月世界の人間で八月十五日の中秋の名月の夜昇天する説話の系列に属するものである。重仁親王の話も、基国から贈られた白馬にまたがり臨幸峠を越えて来、白馬を愛し、御霊神社のご神体も白馬に乗った皇子の姿であったと言われている。しかも重仁親王の命日も八月十五日である。貴種流離譚の中の親王は保元の乱後、基国を頼って都を遠く離れた信濃川上の御所平に定住され、やがて永遠の天上の月世界に昇られたとも往昔、川上の人々は信じていたのだらう

か。

信濃川上の人々の愛し誇りにしてきた重仁親王の話を貴種流離譚として結論づけることはあるとまどいを感じるが、やはり事実はず実として認めなければなるまい。しかし、親王は、事実の世界から抜け出して、深い山々と清澄な流れに包まれ、素朴で温い人情に抱かれて永遠に伝承の世界に生きておられるのである。

#### 後記

この論は昭和四十四年夏の雨海ゼミの合宿の際、ゼミの学生十三名と実地調査し資料を集めたものを基にしてまとめたものである。雨と暑さの中熱心に調査に従事してくれた学生にはよい記念となると思う。

この調査の緒を作って下さったのは、二松学舎大学の卒業生で現佐久高校国語科教諭の佐藤悦子さんであった。佐藤さんの紹介で佐久高校社会教諭で、郷土史の権威棚沢竜吉先生のご指導を仰ぐことができた。先生には期末試験のご多忙中、一日をさいて重仁親王の川上を案内していただいた。先生の学恩なしにこの論及びゼミの合宿の成果はあり得なかつたろう。またこの蔭には佐久高校長中山政市先生のご理解あるご協力があった。そして信濃川上の方々、特に公民館長、役場の係りの方の資料面のご援助も大きい。ここに厚く感謝の意を表します。